



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの医療センター

アートプロジェクト

— 今月のショット —

ワイヤーワークショップ



2016年 12月号

— 院内の小さな声から —

「図らずも」は画家の高松さんが壁画制作中によく口にされた言葉です。「図らずも良い場所にツリーハウスが描けた」「図らずも色合いが現場にあっている」私から見ると、高松さんは多分無意識のうちにとてもたくさん声を拾っています。現場の人の声だけでなく、場所の声、色の声、ものの声。だから自分が意識しないところでその場の要望をしっかりと汲み取って気付かぬうちに自分を調和させているのだと思います。そして、後になって意識が調和に気付いてその言葉を口にされるのです。今回そんな高松さんとコラボしてくださったのはワイヤー作家の奥田由味子さんです。視察現場にあったワイヤー細工の花瓶。そのアートの種を育てて欲しかったのです。奥田さんは高松さんの壁画を尊重しつつ、技師さん達と一緒に見事にその種を育ててくださりました。この制作に関わってくださった全ての方に心より感謝しています。



今月の一枚

作家名：後藤 未希
作品名：

— 検査科待ち合いに必要なアートは？ —

このプロジェクトは検査科技師長さんより「患者さんの不安を軽減してくれるようなアートを。」との要望からスタートしました。まず、現場の技師さん達に集まっていただいて「検査科待ち合い」に来られる患者さんの様子についてうかがいました。「検査の結果がどうなのか、これからどんな治療が始まるのか漠然と不安な感じですね。」「どうしても悪い方に考えてしまうみたいです。」「採血なんかはこどもでもおとなでも第一の関門というか、極度に緊張される方もいます。」「次にどんなアートがあればいいと思うか質問しました。すると「このエリアですぐに検査結果や治療方針が決定する訳ではありません。まだ、悪い結果が出たわけではないのだからできるだけリラックスしてもらいたいですね。」「気持ちをそらす。というか、必要なのは癒しよりも不安を忘れるインパクトかな。と思います。」「物語になっていると待ち時間にそれを追いかけてくれますね」「検査科らしいものもいいです。精密画とか。」とさまざまな意見を頂くことが出来ました。視察した現場カウンターにはワイヤー細工の花瓶に入った葉っぱとピエロの人形がそっと置かれていました。それは技師さん達が患者さんを想うところのかたち。アートの種です。ヒヤリング内容を元に高松市立美術館の学芸員さんに相談し、若手の画家さんを数人紹介していただきました。そして高松明日香さんをお願いすることにしました。高松さんには直接現場の方とも対話してもらい、当院のアートの考え方もお伝えした上で壁画を提案していただきました。彼女が選んだのは「スタンドバイミー」という洋画のいくつかのシーンでした。作品はどうぞ現場でじっくりご覧ください。検査科の願いに画家の感性がブレンドされ患者さんの意識を小さな旅に誘ってくれることでしょう。そして壁画は静かに伝え続けてくれるのです。「大丈夫、いつも傍にいるよ。」と。

百日紅を描きました。穏やかさや静けさを意識して描きました。見てくださる方が少しでもきれいだと感じてくだされば嬉しいです。